

## 平成 30 年度 前期日程

### 「小論文（国際学部国際学科）」の出題意図

課題文は、「多数意見と異なるものへの反発や、多数意見への同意、あるいは同調を促す雰囲気のようなもの」としての同調圧力の問題性について、インタビュー取材を行うジャーナリストの立場から考察している。回答者は同調圧力という概念を説明したうえで、同調圧力が個人と社会に与える影響について具体例を交えて論じることが求められる。

まず同調圧力について説明を行うに際しては、課題文中にある「多数意見と異なるものへの反発や、多数意見への同意、あるいは同調を促す雰囲気のようなもの（1 頁第 2 段落 1 行目）」「流れに逆らうことなく多数に同調しなさい、同調するのが当たり前（1 頁第 2 段落 3 から 4 行目）」という一般的な定義を踏まえたうえで、人気の高い人物に批判的なインタビューを行う際に著者が感じた「風圧」等として同調圧力が発生するという事例と結びつけて説明することが求められる。

次に同調圧力が個人と社会に与える影響については、一面的な批判に終始せず、具体的な事例を挙げながら「同調圧力」がいかなる問題をもたらすのかについて、根拠を示しながら客観的に考察することが望まれる。どのような場合に同調圧力が発生するのかといった事例の説明に加えて、なぜその現象が同調圧力であると言えるのか、誰が誰に対して、いかなる内容の同調を求めているのか、またその結果どのような影響が発生するのかについて、個人と社会双方の側面から記述する必要がある。個人と社会における影響の二点を記述する際に、これら二つを関連づけながら論じている場合には評価が高くなる。具体的には、多数意見とは異なる個々の意見や立場が圧力によって封じられることで、多様性が認められない社会が出現するという状況が抱える問題点について、課題文中にあるメディアの社会的な役割や、国際学部がその教育目標としている多文化共生といった概念と結びつけながら検討することが望ましい。

以上の点を記述する際に、指定された文字数以内で論理的かつ明確に記述する表現・表記能力も評価の対象とする。

出典：国谷裕子『キャスターという仕事』（岩波書店、2017 年、158 - 164 頁。課題文作成に際しては、一部を改変している。）